

スカーレット・ウィザード5



茅田砂胡

中央公論新社



立ち読み
専用

口 挿
絵 画
協 力
DTP
忍 青
小 牧 雅 伸
ハンズ・ミケ



1	7
2	31
3	53
4	78
5	106
6	139
7	150
8	188
9	227
10	238
11	267
あとがき	271

SCARLETT WIZARD

CAST

ケリー・クーア キング・オブ・バイレーツの異名を持つ一匹狼

の海賊、現在はジャスミンと結婚したためクーア財閥副総帥

ジャスミン・ミリディアナ・ジェム・クーア クーア財閥総帥

ダイアナ・イレヴンス ケリーの船の感応頭脳、クレイジー・ダ

イアンとも呼ばれ、必要に応じてミスター・アポロンに姿を交
える

ダニエル・ジョウナス・マクスウェル・クーア ジャスミンの子

マックス(マクスウェル・オガスタス・ノーマン・ウィルバー・ジョ

セフ・ラッセル)・クーア クーア財閥の創始者、ジャスミンの

父親

ケネス・ゴルドマン クーア・キングダムの船長

チャールズ・ブラッドリー クーア・キングダムの整備長

メルヴィン・クラーク クーア・キングダムの情報管理長

アーノルド・ベッカー クーア・キングダムの医務長

マイヤー 機関長

イザドー クーア家の執事

プリステイン・アステル ジャスミンの第一秘書

ジャック・シモンズ エネルギー機関・宇宙船造船部門最高責任

者

パトリック・サンダース 銀行・証券・信販会社などの金融部門

統轄最高責任者

ジョン・ブライアン 情報回線部門最高責任者

スタニスラス・ワイリー ゲート管理、駅(ステーション)関係

最高責任者

リチャード・ジェファーンソン 惑星開発・都市計画部門最高責任

者 ただし現在は引退の身

アロウエイ・ハワード 警備保安部門、武器開発部門最高責任者

ジェームス・ウエインズバーク 稀少鉱石、稀少天然物関連最高

責任者 ただし現在は引退の身

ジンジャー・ブレット 美人映画女優

ニック・ハリソン 映画プロデューサー

クライスト ミュージシャン、趣味でアレンジャーをやっている

シェンブラック 伝説の大海賊

クーア・キングダム クーア財閥の豪華船

フェリクス クーア・キングダムの感応頭脳

クインビー ジャスミン専用機、通称…深紅の空飛ぶ棺桶

バラス・アテナ ケリーの船の名、クーア・キングダムの護衛艦

ゼウス シティのすべてを統括する人工脳

マヌエル・シルベスタン 連邦委員会主席

カール・マクソン 第四軍、機甲兵団(アーマー・コア) 銀十字

警備隊(クルセイダーズ)所属、少佐、通称…ブル・マックス

リンダ・グレアム 連邦宇宙第七軍中尉

ガイア ラー一族

スカーレット・ウザード

⑤

2000年10月10日発売
定価 1,200円（税別）
ISBN 978-4-08-430000-0



クーア財閥総帥夫妻の悲劇的な死が発表されても、ジャスマンに親しい人達はもちろん、彼女が死んだことを信じなかった。

その筆頭は女優のジンジャー・ブレッドである。

《ミニヨン連星》の事故はジンジャーにはまったく納得のいかないものだった。ジンジャーは、ジャスマンがどれだけ優秀な軍人だったかを知っている。

どんな絶望的な状況から必^{かならず}ず生きて帰ってくる、奇跡のようなその手腕を、古強者の男^{ふるつわもの}たちは敬意を込めて、魔法使^{ウイザード}いと呼んだのだ。

その彼女が原因不明の爆発なんかに巻き込まれ、木^こっ端^は微塵^{みじん}に吹き飛ばされて死んだなんて、笑い話以外の何物でもない。ジンジャーに限ったことではない。少しでもジャスマンを知る人には到底納得で

きないことだった。

事故の第一報が入ってから、ジンジャーの下にも多くの取材申し込みがあった。親しい友人であったミズ・クーアの突然の死に関して何か一言、というわけだ。商魂たくましい連中がこんな好機を見逃すわけがないのである。今はまだ答えられるような状況にないからと、取材はすべて代理人を通じて断っているが、故人の親友であったというジンジャーの境遇と抜群の知名度はいつまでも口を閉ざしていることを許さない。

ジンジャーは今、一人だった。

彼女の周りには穏やかな青い海がどこまでも続き、陽光^{さんこう}が燦々^{さんさん}と降り注^{そそ}いでいる。

沖合^{おき}いに、小型だが豪華なヨットを浮かべ、その

ヨットから少し離れたところで、ジンジャーは海水浴を楽しんでいるところだった。

泳いでいるのではない。両手足を浮き具に支えて、長い金髪を藻のように海水に広げて、ジンジャーは仰向けに海に浮いていた。

水着も着ていない、まったくの裸体である。

こんな大胆な真似をしているのも、人に見られる心配がないからだ。ここはジンジャーの私有する海、他の人間は一人も入ってこれない海なのである。

実はこの海も砂浜も人工的に造られたものだった。空に輝いているのも本物の太陽ではない。この快適な空間をつくりだしている巨大なドームの外には空気も水もない、岩だらけの光景が広がっている。

ジンジャーは決して交通の便がいいとは言えない宙域にある小惑星を買い取り、この海と白い砂浜と、その砂浜から少し離れたところに建つ白亜の家を、自分のためだけにつくらせたのだった。

本物の海のある星を買い取るよりは安く済むが、

それでも普通の人間には到底望めない贅沢である。

ジンジャーは本当に一人になりたいときにここへ来る。休暇を楽しみたいだけなら、ジンジャーには何人もの男友達が——それこそ惑星を丸ごと買えるような大金持ちの知人が大勢いるのだから、彼らの別荘へ出かけていけばいい。彼らは下へも置かない態度で出迎えてくれるだろう。ジンジャーは昂然と頭を上げて本物の女王のように振る舞えばいい。

だが、それでは完全に一人になることはできない。どこへ行っても注目されるだけの名声を得た今のジンジャーにとつて、一人きりになれる時間というものは何より貴重だった。それに、ここなら太陽も本物ではないから、日焼けの心配もない。

ゆったりと揺れる海面に身を任せ、暖かい陽光を全身に浴びながら、行方のわからない友達のことを考えた。

初めて会ったのは映画の撮影だった。

その映画の舞台が連邦軍——正確には軍の情報部



だったので、制作会社は連邦第一軍に協力を求めたのである。実際の情報部に協力してもらうわけにはいかなかったが、戦闘機の出動や航行中の艦隊の撮影、施設の使用などの点で軍に全面協力してもらい、さらに俳優陣への戦闘訓練や武器についての講習も依頼したので。

それというのも、その映画の主人公は連邦の腕利き諜報員で、共和宇宙の平和を脅かそうと企む外部勢力の存在に気づいた彼が宇宙の平和を守るため、悪の組織と戦うという、お定まりのストーリーだったからである。いわゆる無敵の英雄ヒーローものだ。

その主人公が武器や戦闘の素人では話にならない。ジンジャーには主演男優ほど本格的な戦闘訓練は必要なかったものの、一応は、基本を習ってくれと言われ、その指導に当たったのがジャスマインだった。この時のジンジャーはお世辞にも仕事に恵まれているとは言えなかった。初舞台を踏んで以来、十年近くも演劇の世界で生きて来たのに、畑の違う映画

界ではそのキャリアはまったくと言っていいほど評価してもらえなかった。極端な話、芸能界には腐るほどいる『女優になりたがっている若い女の子』という、甚だはなは不名誉な商標レッチャルを張られてしまっていた。

この映画もそうだった。演技力などはかけらも期待されなかった。ジンジャーは主人公を助けるヒロインということになってはいたものの、どうみても存在する必要のない役だった。いつも出しゃばって、肝心なところで大失敗をして、悲鳴を上げては主人公にしがみつくというだけの、ただの添え物なのだ。いっそ、もっと臆病おくびょうな女の子であるとか、本当に頭が悪いとか、主演男優を裏切る悪女であるとか、そういう個性のある役ならいくらでも演じてみせるのに、何度脚本を読んでも、このヒロインの心理が掴つかめない。自分を格好よく見せたがっている馬鹿な女の子だとしても、あまりにも一貫性がない。

軍の内部構造や設備に関して専門的なことをすらすらしゃべるかと思うと、武器を扱いかねて危うく

主人公を撃ちそうになり、とたんに取り乱して泣きじゃくり、主人公にすがりつく。この繰り返しだ。

わけがわからなかった。このヒロインはいったい何を考えているのかと、面と向かつて監督に訴えてみたこともあるのだが、返ってきた答えは『そんなこと、どうでもいいだろう』だった。

この監督はジンジャーが何を問題にしているのかさっぱりわかっていなかった。『心配しなくても、きみの顔や姿が映っていれば観客は満足するんだから。ちゃんと魅力的に撮ってあげるよ』と言うのだ。がっかりした、などというものではない。

できるものならこの蠅^{はえ}ほどの脳味噌もない監督の頭を叩き割ってやりたかった。

監督が彼女に求めたものは彼女の外見だけだった。ジンジャーが金髪で、すみれ色の瞳の、きれいな女の子だから、ストーリーをむりやり動かすための道化者に使ったのだ。とどこどこで馬鹿みたいな失敗をして、可愛らしい悲鳴を上げて、主演男優に

しがみついていたればそれでいいのだ。

芝居は上手でも、自分の気持ちを表に出すことはあまり得意ではなかったジンジャーは、言いようのない悔しさと情けなさにと破裂するかと思うところまで追いつめられていた。何もかもが不満で仕方がなかった。

確かに、自分は若くてきれいな女の子だ。画面を彩^{いろど}る花にはちょうどいいだろう。しかし、断じてそれだけではない。決してそれだけでは終わらない。自分はずっと上へ行ってみせる、もつと重要な役だつてこなしてみせると思っているのに、誰も自分にそんなものを求めない。ただ、きれいに化粧して、短いスカートを穿^はいて、にこにこ笑ったり大げさに驚いたりしていればいいのだという。

わたしは女優なのに。

美しい顔も若々しい身体も、大事な武器の一つだ。それは否定しない。それがなかったらこの出演の話だつて来なかった。でも、自分の本当の売り物は

演技力なのに。この容姿とその演技力とが醸し出す
雰囲気と存在感こそが自分本来の持ち味なのに。

誰もそれを買ってくれようとはしないのだ。

そんなこんなで爆発寸前だったところに、現れた
ジャスミンまでが、ジンジャーの神経を逆撫でした。

彼女は明らかにジンジャーを知らず、何の興味も
持っていないかった。顔を合わせるなり言ったものだ。

「おまえが女優のごまクッキーか？」

その女優の名前がシュガー・キャンディだろうと、
クリーム・パイだろうと、それこそどうでもいいと
思っている顔だった。彼女はただ、この素人の女の
子への講習を上司に命じられて来ただけなのだ。

ジンジャーの憤慨は頂点に達したと言っている。

気に入らなかつた。この相手のぶつきらぼうで無
礼な態度も、さらに少女らしい虚栄心から言え、
自分の教育係がこんな下つ端の女兵士一人だとい
うことも気に入らなかつた。

その頃からジャスミンは（当時の名前はジェム・

クーアだった）ジンジャーが見上げるほど大きな
身体と燃えるような赤い髪、他を圧倒する存在感を
持っていた。この時のジンジャーは十五にもなつて
いなかったが、ジャスミンはそのジンジャーと標準
時年齢にして三歳も違わない。恐らくは入隊したば
かりの兵卒で十七にもなつていなかったはずなのに、
あまりにも堂々とした態度であり、ぞんざいな口の
きき方だった。

もちろんジンジャーも負けじとやり返した。

思いつきり不快感を顔に表して、相手を見上げて、
「その胸は筋肉でできているの？」と軽蔑の口調で
言ったのだが、ジャスミンは動じなかつた。不思議
そうな顔をして「何を習いたいんだ？」と言った。

協力しろと言われてはきたものの、ジンジャーが
あんまり小さな女の子なので疑問に思ったらしい。

実年齢は三歳と違わないのに、二人は同じ年頃の
少女にはとても見えなかつた。極端な話、十も違
うように見えた。ジャスミンは前述したとおり、桁外

れに大柄な体格だったし、ジンジャーの背が伸びて、体つきが丸みを帯びて、優雅な女性の魅力と威厳をたたえるようになるのはこの後の話である。

「おまえの役柄はどういう設定なんだ？ 兵士か？ それとも情報処理専門の分析官か？ どちらにせよ、おまえの歳では専門家スペシャリストというのは無理があるぞ」

「おあいにくさま。わたしの役はただの女学生よ」
「ただの女学生が、どうして腕利き諜報員と一緒に悪の組織と戦うんだ？」

「それはこつちが訊きたいわ」

そんなことはまさに、こつちが訊きたかった。

説明するより早いと思って、脚本を突きつけた。

ジャスマンはざつと眼を通すと、一言、

「駄作ださくだ」

断言して脚本を放り投げたものだ。

「おまえ、こんな駄作ださくに出演するほど仕事に困っているのか？」

「失礼ね！ 誰が困るもんですか！ わたしが何年、

舞台上に立ってると思ってるのよ！」

「知らない」

「十年よ！」

真っ赤になつて食つてかかった自分を思い返すにつれ、ジンジャーはその幼さに苦笑すると同時に、ジャスマンには人を怒らせる才能があるとつくづく思うのだった。

それなのに、ジャスマンときたら、自分の言動の何がジンジャーの気に障さわったのか、さっぱりわからなかつたらしい。不思議そうに尋ねてきた。

「それだけのキャリアがあるなら、わざわざこんな駄作ださくに出演することもないと思うがな。ずっと舞台一筋という役者だっているだろうに？」

「いるわ。でも、わたしは、それじゃ、だめなのよ。ずっと子役として活躍してきたんだもの」

ジンジャーは舞台人としての自分の将来に、薄々、不安を感じ取っていた。大人になったら、子役ではいられない。だが、ジンジャーよりキャリアが長く、

ジンジャーより舞台映えのする女優はそれこそ星の数ほどいるのだ。長い間、子役として活躍していたからと言って、その中にすんなり入っていきけるとは思えなかった。それどころか確実にはじき出されることもわかっていた。

今はまだいい。ジンジャーは実際の年齢より幼く見えるから、おませで純情な女の子で通用する。

でも、ジンジャーより若い子役も大勢いるのだ。

いずれ、その中の誰かが頭角を現してきて、今の自分の立場に取って代わるだろう。

そうした不安をはつきり口にするのが恐ろしくて、それどころか考えるのもいやで、でも、どうしたらいいかわからなくて、気分転換に前から話のあった映画をやってみようと思ったのだ。

「駄作っていうけど、それはわたしだって、脚本がここまでよくないとは思わなかったけど、力のある制作会社よ。中央銀河のほとんどに配給されるわ」

そこが肝心だった。

ジンジャーのキャリアは長い。だが、ほとんどは舞台で築いたキャリアだ。舞台では結局、限られた人しか見ることができない。

それなのに、この赤毛の無礼な女兵士と来たら、遠慮や神経というものを持ち合わせていないとしか思えなかった。

「つまり、子役としてのおまえには需要があったが、大人のおまえは必要じゃないということなのか？」

人間、本当のことを言われると一番、腹を立てる。特にこれは最悪だった。火の中の栗くりをわざわざつ

ついたようなものだ。

十四年生きてきて、こんなにも怒りを感じたのは初めてだった。ジンジャーは小さな拳を握りしめ、全身を震わせて、大きな相手をきつと睨にらみつけた。

かなわないのはわかっていても、この憎たらしい相手を殴りつけてやりたかった。

「そんなことには、ならないわ」

あまりにも怒りが激しかったので、ジンジャーの

紫の瞳には涙が滲^{にじ}んでいた。しかし、泣かなかつた。

泣くわけにはいかなかつた。

「絶対、させない！ そんなこと！ わたしは——わたしは生き残つてみせるわ、絶対によ！」

こんな子どもっぽい言葉しか出てこないところが、なおさら腹立たしかつた。

ジャスミンはしげしげと怒^{いか}れるジンジャーを眺めていたが、その眼がおもしろそうな色にきらめいた。

「それなら、生き残る方法を考えなきゃいけないな。こんな駄作でも好機^{チャンス}には違いないんだろう？ この映画でおまえが『できる』ところを見せるんだ」

「そんなことくらいわかつてるわよ！ だけど、どうしろって言うのよ！ こんな脚本で！」

言い始めたら、次から次へと監督や脚本に対する不満があふれてきて、止まらなくなつてしまった。

完全なヒステリーである。

大声で叫び続けるジンジャーを後目に、ジャスミンは投げ捨てた脚本を拾い上げ、丹念に読み始めた。

どういうつもりかと思つた。そんなことをしても無駄だと言いたくなつたが、さすがに喚^{わめ}き疲れて、ジンジャーは何故か、ジャスミンの言葉を待つ気になつて黙つていた。

「これを読むと、おまえが演じる女学生——ジェニファー？ このジェニファーには一貫性のかげらないように見えるな」

「見えるんじゃないよ、本当じゃないのよ。どういうつもりでこんな馬鹿な女の子にしたのかつて思うわ。めちやくちやじゃない」

「そうでもないぞ。話の進行上の面倒な説明は全部、ジェニファーが引き受けているじゃないか」

きつと主演男優がいやがつたのだとジンジャーは思つた。彼はアクシオン俳優として人気があつたが、それだけに自分の見せどころは肉体を使った場面にあると考えていたからだ。わかりやすく言えば派手な立ち回りに、である。

その結果、ただの女学生であるジェニファーが敵

なると、とたんにへっぴり腰になるんだ」

呆気にとられたジンジャーだった。

それはあまりにも曲解のしすぎだと思った。脚本では、ジェニファーはあくまで気まぐれな好奇心と悪戯心から事件に首を突っ込むことになっていて、そんな設定は一行も書かれていないのだから。

その反面、確かにそうすれば説明がつくと思った。

たった一つの要 石を置くだけで脚本の全体像、少なくともジェニファーの印象はがらりと変わってくる。ただのお馬鹿な女の子ではなく、軍事ものが大好きで、そのために普段は決してやらない無茶をやったとしたら。その無茶の結果、自分の置かれた立場がようやく呑み込めたとしたら、恐くなくても当然である。めそめそ泣くのも自然な流れだ。いや、泣かないほうがおかしい。

そうした考えが一瞬にして脳裏をよぎったものの、ジンジャーは大きく喘いで首を振った。

「でも、そんなの無理よ。わたしにはわからないわ。

軍艦だの戦闘機だの、あんなもの、どこがいいの?」

ジンジャーにとつては基地にずらりと並ぶ大きな機械も、練習のためにと手渡された銃器も、人生において何の意味も持たないものだった。それこそ、あってもなくてもどうでもいいものだ。

「とりあえず、かっこいいと思えばいいのさ」

「かっこいい?」

「でなければ、『きれい』でも『すてき』でもいい。どうしてもできないなら——そうだな、好きな男を見るように見てみたらどうだ?」

「あんな不格好な機械のかたまりを?」

同じ女のくせになんてことを言うのかと思ったが、急いで言い直した。

「そりゃあ、あなたはそういうものが好きだから、軍に入隊したんでしょうけど……」

「そうだな。そして、おまえは違う」

ジャスミンは相変わらずおもしろそうな眼でジンジャーを見つめている。

簡単にわからないと言ったことが急に恥ずかしくなつて、ジンジャーは恥ずかしさをごまかすために、つんと頭を上げた。

「いいえ、そうね。わたしは女優だもの。好きじゃなくたって好きならいりできるわ」

「だめだな。上辺^{うわべ}だけ真似したつてすぐにばれるぞ。ちよつとやってみろ。見てやるから」

「待つてよ。あなた、素人のくせに、わたしに演技をつけようつていうの？」

「わたしは芝居のことなんかもちろん何も知らない。でも、軍艦や戦闘機が大好きだという人間ならよく知つている。自分で乗らなくても、動かさなくても、そういう人間がどんなに熱っぽい眼で好きなものを見てゐるか、どんなふう^{ふう}に語るか、よく知つている」
だから、小手先の演技には騙^{だま}されないといいのだ。
「おまえは不格好だと言うが、機械が好きで好きで仕方がない女も大勢いるんだ。ここの整備班の女性陣はみんなさうだぞ。共和宇宙は広いんだ。中には

芋虫^{いもむし}が大好きとか、毒蛇^{どくへび}が大好きとかいう女だつてゐるかもしれない。いずれ、おまえのところ^{ところ}にそうした女の役が回つてくるかもしれない。その時に、そんなものは好きになれないからつて断つたら女優失格じゃないか」

その通りだとジンジャーも思った。

中にはそういう理由で仕事を選ぶ女優もいるが、ジンジャーは挑戦^{もくじ}しがいのある役なら、たとえそれが物乞^{ものご}いだらうと娼婦^{しょうふ}だらうと、やってみたかつた。

彼女の望みは、今の仕事に見いだしたやりがい^{がい}が何かと言へば、芝居の中で自分ではない他人になること、ほんの一時^{いっとき}、別人の人格を、その人生を表現してみせることだつたからである。

ただの物まねなんかではない。物まねなんかで、見る人が共感^{きんかん}してくれるわけがない。ジンジャーはそこに本物を体現^{てげん}させようとしていた。少なくとも、ジンジャー自身はそのつもりだつた。

「おまえは女優なんだろう？　しかも、生き残ってみせると言った。女優なら芝居で生き残るもんだ。違うか？」

「違わないわ」

きっぱりとジンジャーは言った。

「いいわ。わたしはこれからジェニファーになる。わたしのジェニファーを自分でつくることにする。彼女がどうして軍艦や戦闘機なんかになんかにそんなに興味を持ったのかはわからないけど……いえ、これじゃまずいわね。理由が必要かしら？」

「何かを好きになるのに理由はいらなと思うぞ。今のおまえの疑問は、男の子が女の子に向かって、人形遊びなんかのどこがいいのかわからない、何がもしろいのかちゃんと説明してほしいと言うようなものだ。おまえはその答えを知ってるのか？」

ジンジャーは頭のいい少女だったので、相手の言いたいことを即座に呑み込んだ。頷いた。

「わかったわ。そんなことを言われたって、好きな

ものは好きなのよとしか言えないものね。もつともわたしは人形遊びはしたことはないけど、そういうことでしょ？」

「そういうことだ」

少しだけ光明が見えた気がしたが、問題もあった。ジンジャー一人が独自に役の解釈をするとなると、他の俳優陣との演技に食い違いが生じてくる。主演俳優にもいくらかは協力してもらわなければ、それこそ話の辻褄つじまが合わなくなってしまう。

「それなら、おまえの狙いは隠して、監督と主演の男に、芝居のちよつとした変更を頼めばいい」

「わたしの狙いは隠して？」

「そうさ。この駄作映画の中でおまえだけは光って見えるようにしたいなんて言ったら、二人とも協力なんかしてくれないだろう？」

鋭いところを突いてくる。主演俳優は自分が一番目立ちたいと思っっているだろうし、監督は監督で、これは自分の作品なんだと思っっているはずだ。

「だから、黙っていたほうがいい。おまえに都合のいいように、うまくあの二人を動かすんだ」

この言葉には驚いた。思わずジャスマンを見つめ返したくらいだ。

「でも……脚本のない芝居はしたことがないのよ。うまく動かすって、どうやって？ わたしが芝居をつくるってことなの？」

長いこと大人達の間で生きてきたとは言っても、ジンジャーもまだ十四歳。ほんの子どもだったのだ。あの監督に正面から頼んでも脚本の変更など承知してくるはずがない。主演男優はなおさらだ。

「難しく考えることはない。たいていの男はきれいな女の子の頼みに弱いもんだ。それに、あの監督も、主演の男も、若い女には脳味噌なんかはないと思ってるタイプみたいだからな。好都合だ」

ジャスマンはにやりと笑って続けた。

「そういう男に限って自分のほうが脳味噌がない。だから、おまえは頼み方だけをくふうすればいい。

眼をつり上げて声を尖らせて直訴じきせなんかするんじゃないぞ。逆効果だからな。甘ったるい鼻声を出して上目使いにおねだりでもしてみせれば、あの男ども、たちまち上機嫌になって『いいとも』と請け負ってくれるだろうさ」

ジンジャーは思わず顔をしかめた。

そんな真似は——舞台以外でそんな娼婦のような真似をするのは、幼いながらも今日まで自分の芸で生きてきた誇り高い少女には屈辱くつじやくに思えたのだ。

苦い顔のジンジャーの心中を知ってか知らずか、ジャスマンはからかうような笑顔を向けてくる。

「わたしならそんな真似はまっぴらごめんだ。男に媚こびて、甘えて、その力に頼っていい仕事を回してもらうことをよしとするなら、軍になんか入らずにホステスになってる。でも、女優ならこのくらいの芸当は朝飯前のはずだぞ。どうだ、やれるか？」

そこまで言われて引き下がるほど、ジンジャーはおとなしい性格ではなかった。おとなしいどころか、

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。